

## 視点

# 幼児期の学びに向かう力の育ち



ベネッセ教育総合研究所  
次世代育成研究室室長／主席研究員 高岡 純子

私が所属する研究室のメンバーは、全員ワーキングマザーです。毎日、夕方になると「お先に失礼します」という声とともに急いで幼稚園や保育園へ子どものお迎えに向かいます。仕事と子育てに忙しい毎日ですが、その中でも、子育てについての悩みはさまざまです。現在、乳幼児を持つ親の2人にひとり、自分の子どもが生まれるまで赤ちゃんに接したことがないという状況の中で、親として乳幼児期の育ちをどのように捉え、子育てをすればよいか日々迷うことが多いようです。

この4月から施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、幼児期に育てたい資質能力のひとつに「学びに向かう力」があげられています。「学びに向かう力」とは、目標を達成するために他の人と協力したり、自分の感情をコントロールする力のことであり、「社会情動的スキル」とも言われています。OECDの研究によると(\*1)、この力は、早期に身に付けるほど、その後には得られる力も積みあがっていくものであるため、家庭教育や幼児教育・保育の場で身に付けることが大切であるとされています。私たちの研究室では、日本において「学びに向かう力」が幼児期にどのように育つかについて縦断調査を大学の先生方とともにを行っています。その結果の一部をご紹介します(\*2)。

この調査では、幼児期から小学校の学習生活に移行して適応するために必要とされる力や幼児期に育てたい生涯にわたって必要な力として、「生活習慣」「文字・数・思考」「学びに向かう力」の3つの軸をおき、年少児から毎年1回(2~3月)、母親を対象にアンケートを行っています。調査結果では、年少時期の「生活習慣」の定着が、年中時期の「学

びに向かう力」に影響を与え、「学びに向かう力」の定着が年長時期の「文字・数・思考」に影響を与えていることがわかりました。また、小2までの結果から、これらを幼児期に身に付けることが小1での「学習態度」につながり、さらに小2での「学習態度」にも結びついていることがわかりました。幼児期の育ちが土台となって、小学校以降の学習や生活に大切な「学習態度」に結びついていたのです。

また、「学びに向かう力」「文字・数・思考」の力が高い5歳児は、親子で日常的に、学びにつながるようなやりとりを伴う遊びをよくしていることもわかりました。そうした遊びをよくする親は、子どもに考えることをうながしたり、子どもを尊重する傾向が見られます。子どもに考えることをうながすとは、親が聞き手となって子どもの言葉に耳を傾け、言いたいことをもっと膨らませてあげたり、代弁してあげることで、子どもが自信をもってより詳しく自分で考えたり発言する意欲を持てるようにしてあげることです。親子で言葉遊びをしたり、積み木やお絵かきなどの遊びを楽しむことを通して、子どもが自分で考えられるようになることにつながります。この結果は、母親の就業の有無には関連がありませんでした。忙しい中でも、接し方次第で子どもの育ちをよりよくしていくことが可能であるといえるでしょう。共働き世帯が増加していく中で、子どもの健やかな成長・発達を育むために、家庭での子育てと幼児教育・保育が連携して子どもへのよりよい働きかけや環境作りをしていくことが大切であると思います。

\*1：社会情動的スキルー学びに向かう力ー(OECD、明石書店2018)

\*2：幼児期から小学生の家庭教育調査(ベネッセ教育総合研究所2012-2017)